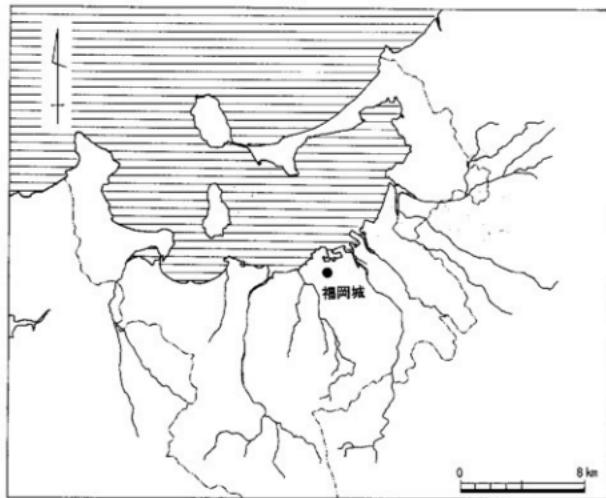


福岡城
月見櫓

福岡市埋蔵文化財調査報告書第316集



1992

福岡市教育委員会

序

福岡市の中心部に位置する福岡城は、市街地中心部に数少ない縁を提供する場所として市民に親しまれておりますが、そのむかし47を数えたと言われる櫓をはじめとする建造物の大半は失われており、現在では幾つかの櫓、門あるいは石垣が当時の姿を今に伝えるのみです。

福岡市教育委員会では、福岡城関連建造物の調査や資料収集に努めておりますが、このたび博多区千代の崇福寺に残る旧福岡城櫓を城内に移築復元する運びとなりました。この櫓はこれまで崇福寺の仏殿、拝殿として使用されていましたので、仏殿は月見櫓、拝殿は花見櫓と伝えられています。移築に際し、それぞれの櫓跡について発掘調査を実施することになり、まず月見櫓の調査を平成2年度に実施しました。本書はその調査成果について報告するものです。

本書が市民をはじめ多くの方々に活用され、文化財保護のご理解を深める一助とならんことを願うとともに、調査に関係された皆様のご協力とご理解に対し深く感謝の意を表します。

平成4年3月

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

- 本書は平成3年3月1日から31日にかけて福岡市教育委員会が実施した中央区域内所在 史跡福岡城月見櫓跡の確認調査報告書である。
- 本書に使用した図の作成・製図は山崎純男、吉武 学(福岡市教育委員会)、川端正夫、白木英敏(調査補助員)、田中克子(整理補助員)が行った。
- 本書で使用する方位は磁北である。
- 本書の執筆・編集は吉武が行った。
- 本書に関する記録・遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵管理される。

遺跡調査番号	9065	遺跡略号	F U E
調査地地籍	福岡市中央区域内	分布地図番号	060-E-1
開発面積	—	調査対象面積	190m ²
調査期間	1991年(平成3年)3月1日～3月31日		

本　文　目　次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の位置と環境	1
III. 調査の記録	3
1. 調査の概要	3
2. 遺構	5
3. 遺物	8
N. おわりに	8

挿　図　目　次

Fig. 1 福岡城跡位置図(1/25,000)	2
Fig. 2 史跡福岡城跡平面図(1/10,000)	3
Fig. 3 月見櫓跡検出遺構実測図(1/100)	4
Fig. 4 出土遺物実測図Ⅰ(1/4)	6
Fig. 5 出土遺物実測図Ⅱ(1/4・1/2)	7

図　版　目　次

PL. 1 出土遺物Ⅰ
PL. 2 出土遺物Ⅱ

I. はじめに

1. 調査に至る経過

黒田長政の築城になる福岡城は、『福岡県地理全誌』によると47の櫓を持つ平山城であったとされるが、現存する櫓は極めて少なく、大半のものは失われて現存しない。月見櫓は本丸天守台から見ると、北東に見下ろす位置にあったとされ、建物自体は崇福寺仏殿として伝えられている。崇福寺に伝わる福岡城関係の建築物として、山門、仏殿、拝殿があり、このうち仏殿は月見櫓、拝殿は花見櫓と伝えられている。うち、仏殿・拝殿を福岡城内に移築復元することとなり、平成2年度に月見櫓跡に対して事前に遺構確認調査を実施する運びとなった。調査に先立ち、史跡の現状変更許可申請を文化庁あてに提出し、この許可が下りるのを待って調査を開始した。また、発掘調査は隣接する鴻臚館跡範囲確認調査と深く関連することから鴻臚館跡調査担当が行うこととし、平成3年3月1日～31日にかけて調査を実施した。

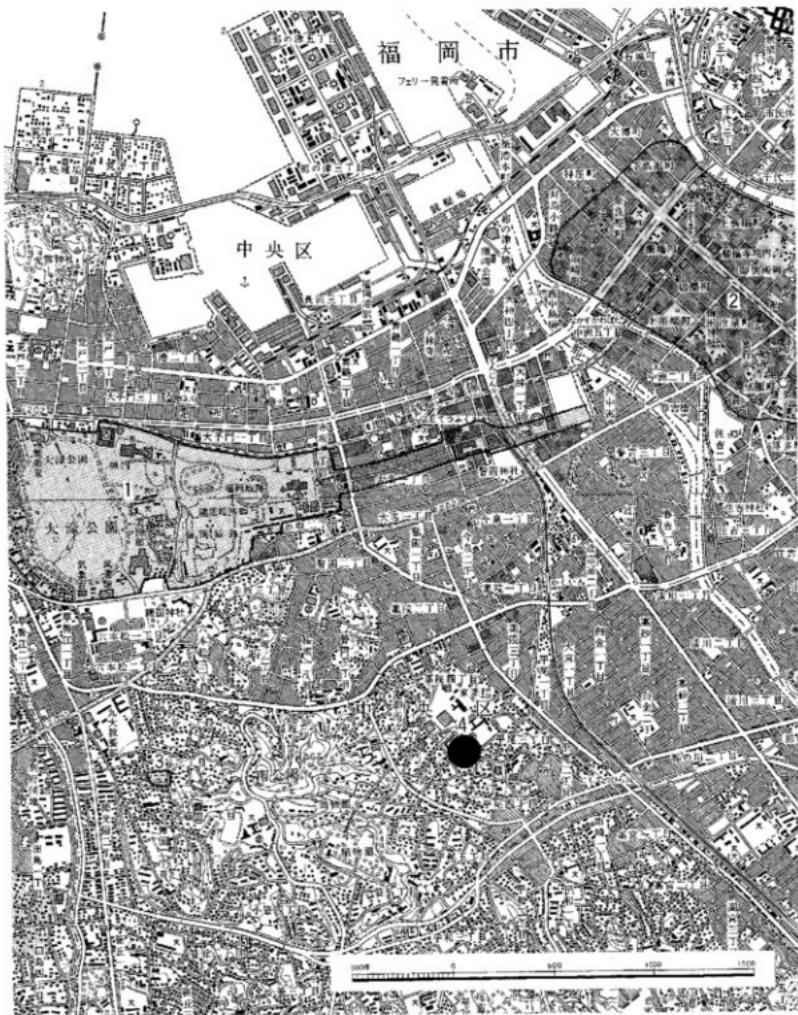
2. 調査の組織

調査を平成2年度、整理報告書作製を平成3年度に行った。この間、平成3年4月に機構整備により組織に変更があった。

調査主体	福岡市教育委員会 教育長 井口 雄哉		
調査総括	文化課長 於保 清人（前）	文化財整備課長 後藤 直（現）	
	文化財管理係長 岩下 拓二（前）	管理係長 後藤 晴一（現）	
調査庶務	文化財管理係 谷口 哲也（前）	管理係 普原 善則（現）	
調査担当	鴻臚館跡調査担当副主幹 折尾 學		
	鴻臚館跡調査担当主任 山崎 純男		
	鴻臚館跡調査担当 吉武 学		
	文化財管理係 三木 隆行		
調査補助	川端 正夫（現甘木市教育委員会）、白木 英敏（現宗像市教育委員会）		
整理補助	田中 克子（現太宰府市教育委員会）		
作業員	岩橋 真、萩尾行雄、藤田圭三、松原高博、高田基一郎、唐島栄子、栗田 、久賀登世子、藤アイ子、成清直子		

II. 遺跡の位置と環境

福岡市中央区に所在する福岡城は、博多湾を巡る海岸線のはば中央部に向かって北に伸びる独立丘陵の先端部に位置している。福岡城築城前の地形については貝原益軒の「筑前国続風土記」に詳しいが、これによると南側の赤坂山から続く丘陵の端部が本丸から北西方向の御座屋敷に向かって伸びており、福岡城は福崎と呼ばれたこの丘陵をうまく取り込んで城内の最も高い部分を天守台としてい



1.福岡城跡 2.博多遺跡群 3.六本松遺跡 4.平尾古墳(消滅)

Fig. 1 福岡城跡位置図 (1/25,000)

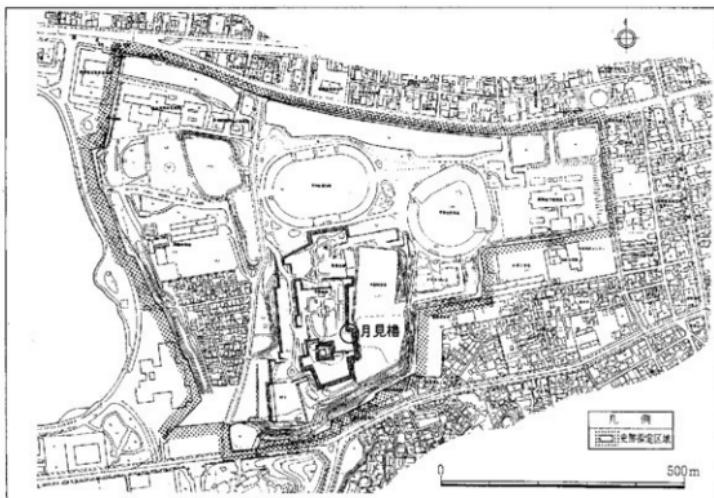


Fig. 2 史跡福岡城跡平面図 (1/10,000)

る。基盤となる丘陵は真岩がちの砂岩と頁岩の互層によって形成され、これを段状に整地して各曲輪を造り出している。月見櫓は本丸の東辺部に位置し、天守台から見ると北東に見下ろす場所にある。現地表面の標高は24mを測り、東には比高11.3mの石垣下に三の丸庭園を見下ろし、その向こうには福博の町並みを月下に遠望することができたであろう。

福岡城を含む福崎丘陵の歴史については、昭和63年（1987年）を契機とした現在継続中の鴻臚館跡範囲確認調査に伴い数々の新知見が得られつつある。発掘調査や城内全城のボーリング調査などによって、もとの福崎丘陵は、本丸から御鷹屋敷へ伸びる丘陵を主幹とし、その東西に枝状に分かれた支脈が数多く形成されていた状況であったことが判明した。古墳時代以前の遺構としては、天守台に箱式石棺墓が今も残っており、また鴻臚館跡の調査では丹塗りの古墳石室材や銅鏡・銅鏡・玉類が出土することから古墳が破壊されていることが分かる。古代に入ると筑紫館が造営され、少なくとも丘陵東側にはかなり広い平坦地を持つ地形となっていることが判明している。中世の遺構には地下式土坑や板碑などがあり、墓地ないし寺域であった可能性がある。

III. 調査の記録

1. 調査の概要

調査は月見櫓の規模の解明を目的としたものである。現状では一部を残し基壇がほとんど埋没して

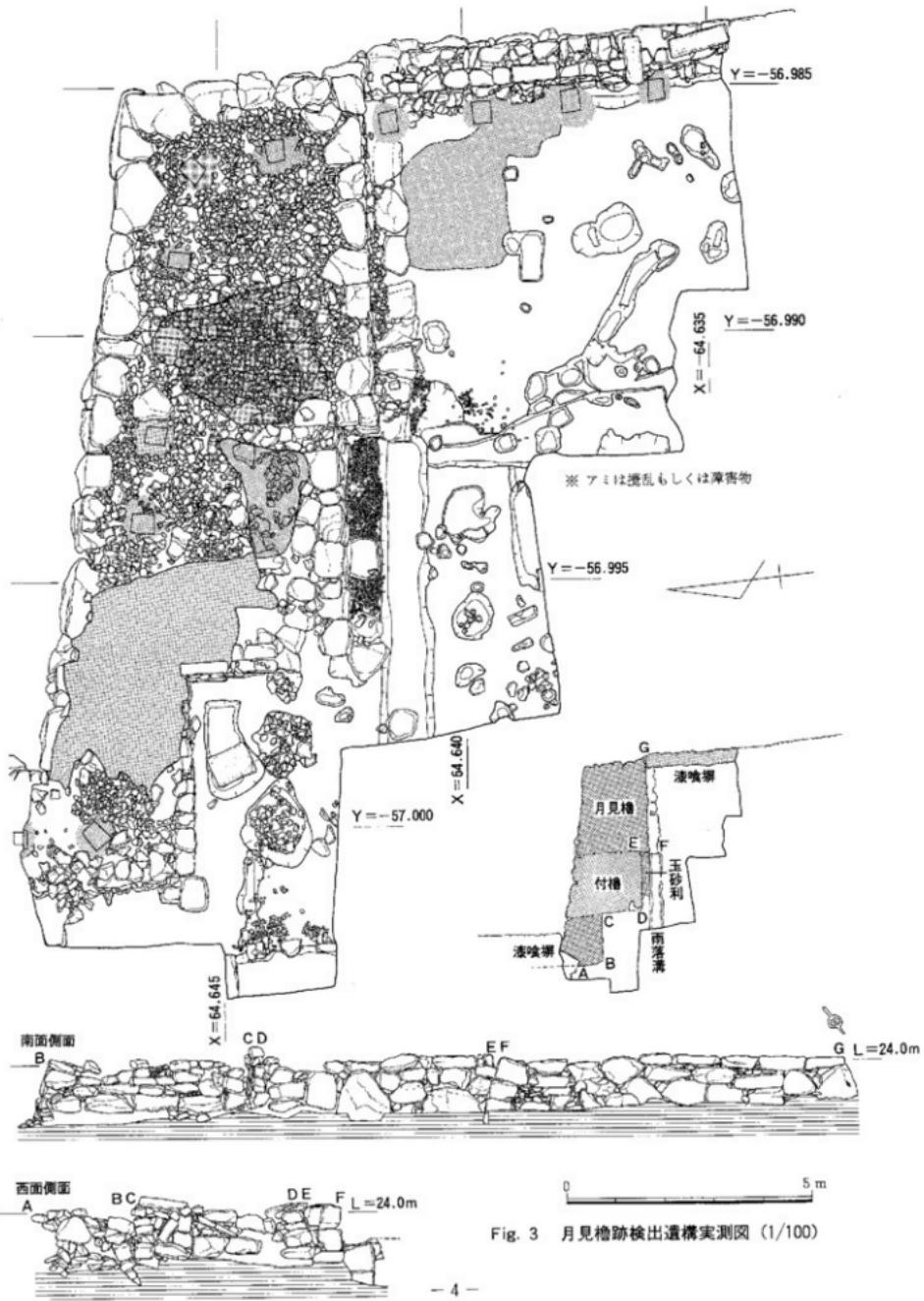


Fig. 3 月見櫓跡検出遺構実測図 (1/100)

いたため、予想できる範囲でやや広めに調査区を設定した。現地は舞鶴城（福岡城の別称）址公園として春には桜の名所として親しまれているところでもあり、このため調査区内には樹木や手すりなどがあり、可能な範囲で低木等を移植したが、やはり多くの制約を受けたため、調査区がややいびつな形をしている。検出した遺構は月見櫓基礎とこれに取りつく漆喰塗基壇であるが、福岡城廃絶後に掘られたゴミ穴などにより著しく破壊を受けている。基礎部以外は表土を除去したところで掘削を中断したが、幾度かの建て替えを示す築地層が確認された。櫓本体の基礎は2つの基壇からなっており、本丸出隅部に造られたやや東西に長い方形基壇の内側に、やや南北に長い方形の基礎が取りつく形となっている。前者が月見櫓の基礎、後者は月見櫓に取りつく付櫓の基礎と思われる。基礎上面は石垣裏込石が露呈する状態であり、櫓の礎石と考えられる礎が一つ残っていた。おそらく櫓を移築する際に、礎石ごと運び去ったものと思われる。漆喰塗基壇は櫓南東隅に南から取りつく部分と、櫓北西隅に西から取りつく部分を検出した。なお、調査時期が桜の開花時期と重なったため、樹木に遮られて、遺構の全体写真が撮影できなかった。

出土した遺物は櫓あるいは漆喰塗に葺かれたと思われる瓦類が上で、一部近代の陶磁器や福岡陸軍病院に関する遺物がある。遺物はコンテナ5箱分が出土した。

2. 遺構

検出した遺構は、月見櫓基礎、付櫓基礎、漆喰塗基壇、瓦滴り、ゴミ穴である。ゴミ穴は福岡陸軍病院時代以降のものであり、本書では説明しない。また、調査区の南寄りには不定形のピットが多数検出されたが、これらは樹木の根跡と考えられる。

月見櫓基礎

本丸東辺中央部の出隅北角に位置する。基礎平面形は東西にやや長い方形である。北、東面は本丸石垣に面を合わせている。基礎の規模は東辺4.9m、西辺5.8m、北辺7.2m、南辺7.1mを測り、西に若干開く。基礎上面の北西隅に櫓の礎石と思われる偏平礎が一つ残っている。基礎の上面は月見櫓移築時あるいはその後の改変で荒れているが、現況の検出面で石垣天端のレヴェルは掘っており、石垣積み上げをこの高さで一時中断し、ここから櫓本体の梁造に取り掛かる工程を取ったのではないかと思われる。基礎の裏込石には拳大の自然礎を用いている。基礎の側面は概ね三段の石垣で構成され、その高さは1.0mを測る。また、付櫓に接する西面にも石垣がきちんと積まれており、付櫓が月見櫓基礎の構築後に改めて付け加えられたものであることを示している。基礎南側にはタキ状に大きめの礎を配しており、この礎の上面が当時の生活面と考えられる。なお、南東隅の一石には「ぬ」の刻印がある。

付櫓基礎

月見櫓の西側に取りつくと見られる櫓で、福岡城古絵図に見る月見櫓にはこの付櫓を描いているものが多い。基礎は南北にやや長く、南西隅の石垣は崩れ落ちているが、東西長4.8m、東辺5.1m、西辺6.0mと推定され、西に開く台形プランをなすと思われる。基礎上面には桜の老木があり、約1/3は掘削できなかったが、礎石等、建物の痕跡を示す遺構は確認できなかった。石垣天端のレヴェルは掘っており、月見櫓基礎の高さに等しい。裏込石は月見櫓と同様拳大の自然礎である。基礎側面の石積みは基本的に三段である。基礎の南側には基礎に沿って幅0.7mの帯状に玉砂利を敷き詰める。また、この更に南側には深さ0.1m強の浅い溝があり、雨落ち溝である可能性が高い。おそらくここが櫓への入口にあたるものと見られる。

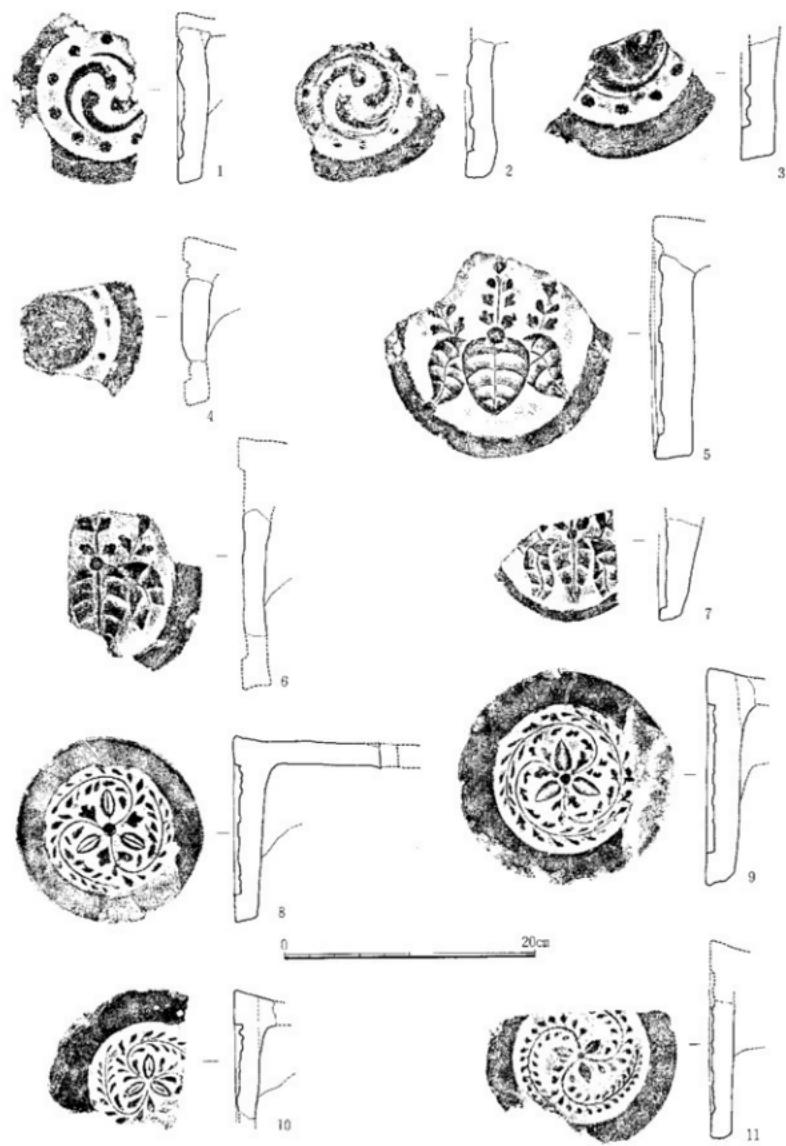


Fig. 4 出土遺物実測図 I (1/4)

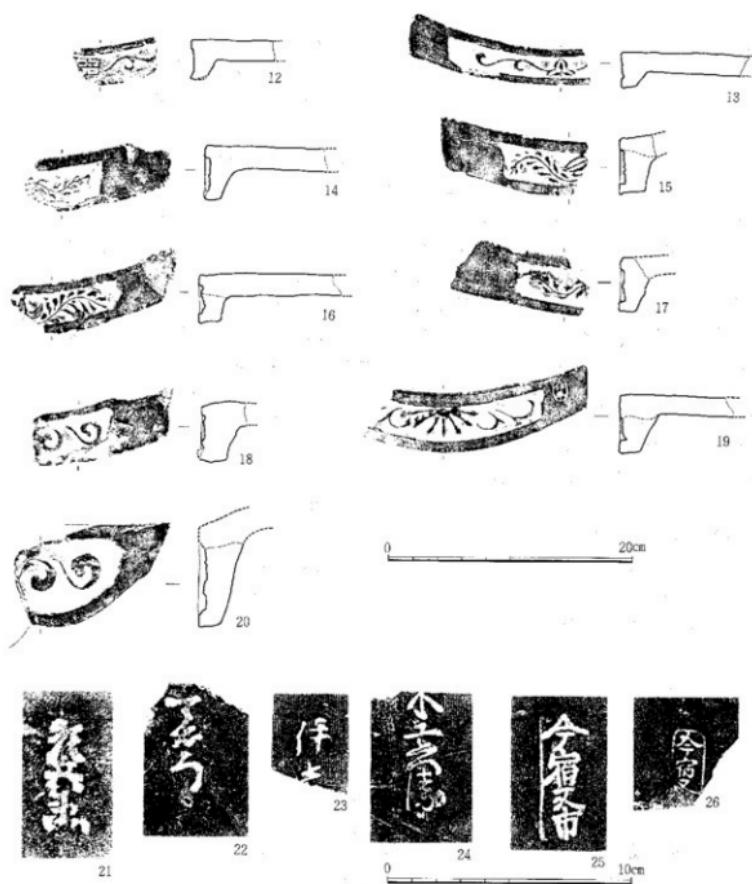


Fig. 5 出土遺物実測図 II (1/4・1/2)

漆喰基基礎

漆喰基基礎は橋南東隅に南から取りつく部分と、橋北西隅に西から取りつく部分を検出した。南東隅の塗は、石垣上端部から内側に0.4mの幅で並べた偏平縞の上に塗を造ったものと考えられ、これの内側からは漆喰のかけらが多数出土した。これに対し、北西隅では3m近い幅広の石壁が橋基壇に取りついており、構造が異なっている。後者は犬走りを伴う塗であった可能性がある。

3. 遺 物

調査の目的が範囲確認であり、遺構の破壊を極力避けたため、プライマリーな状態で出土した遺物は皆無に等しい。1～26は瓦であるが、うち18、20が付櫓の裏込、1が月見櫓南側の整地層から出土した以外は、全て表土あるいは近代のゴミ穴から出土した遺物である。

1～11は軒丸瓦である。1～3は内区に二つ巴文を配し、ともに巴は逆時計回りに尾を引く。1、2は径が14cm前後で珠文數は10であるが、同范ではなく、2の巴の尾が少し長い。3は径が18cm前後の大型品である。4は内区に黒餅文を配し、瓦当径は約14cmに復元できる。5～7は桐文を配す。5は「五七の桐」、6は「三五の桐」で、7は枝葉の数は不明である。5に比べ、6は薄手、7は小型である。瓦当面は正円ではなく上下にやや長い椭円形を呈し、幅は5が18.0cm、6が17cm前後、7が14cm前後を測る。8～11の内区は三つ巴藤文で、藤は10を除いて逆時計回りに枝が伸びる。藤の枝葉は11が密で、他は疏である。また、9は瓦当が一部銀色をなし、8は瓦当全面が銀色を呈する。瓦当径は、8が14.5cm、9が16.9cm、10が15cm、11が15.2cmをそれぞれ測る。

12～20は軒平瓦で、いずれも内区には均整唐草文を配する。12の中心飾りは格子、13は3弁の花文である。14～17は唐草を藤に代えたもので中心飾りは15は下向き、16は上向きの花弁である。いずれも瓦当面の一部あるいは全面が銀色を呈する。18の唐草は強く巻く。19の中心飾りは下向きの7弁の花文で、脇区に「蒋平」の刻印を打つ。20は朝鮮半島系の軒平瓦で、瓦当面に花型の木目が残る。

21～26は平瓦に打たれた刻印である。21は「彦兵衛」、22は「田郎右エ門カ」、23は「伊左口」、24は「李兵衛」、25は「今宿又市」、26は「今宿又口」と読める。なお、26は1の上面に押された刻印である。

以上の瓦のうち、5～7の軒丸瓦、20の軒平瓦は名島城から福岡城に移転する際に持ちこまれた瓦である可能性が高い。また、瓦の出土量は決して多くないが、廃城前に月見櫓ないし漆喰附に葺かれてあった瓦は、8～11の軒丸瓦と14～17の軒平瓦をセットにしたものであった可能性が高い。

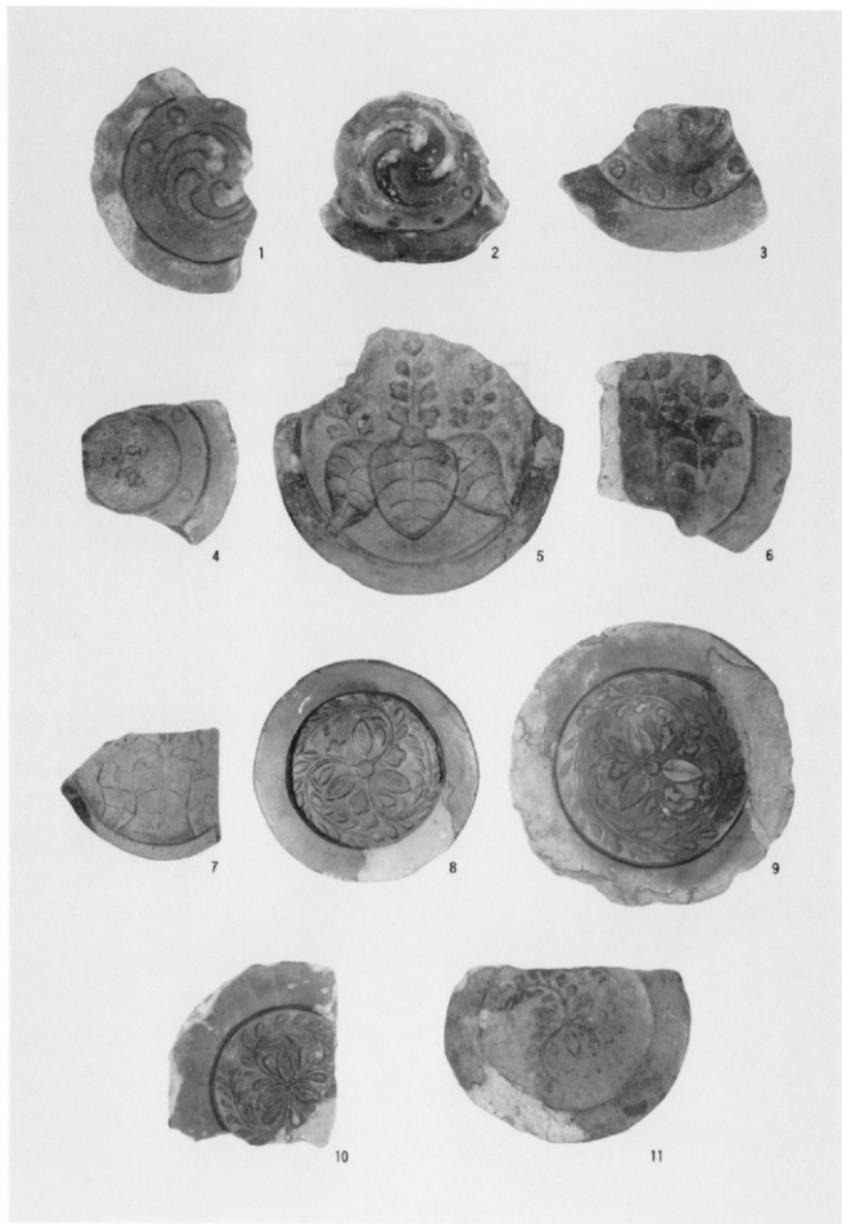
IV. お わ り に

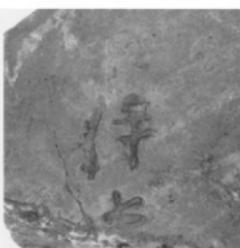
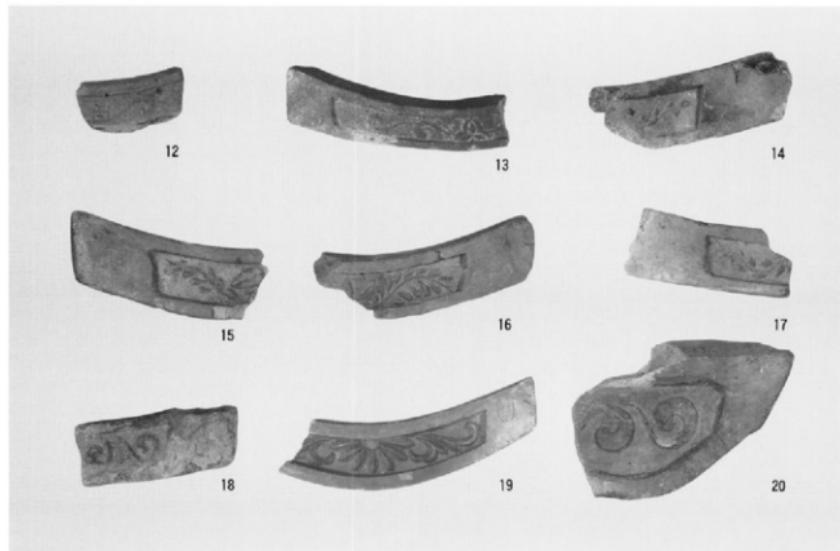
調査の目的は月見櫓の規模の解明にあった。調査の結果、月見櫓は現在残る基壇の規模から、4.9m×7.1m以内に収まる建物で、この西側に4.8m×5.1m以内の建坪を持つ付櫓が接していたことが判明した。しかし、建物を支える礎石等はほとんど無く、建物の構造を復元することはできない。櫓の南北には漆喰附が取りつくが、南北で規模が異なり、北側のものが大きい。また、付櫓の南に接して玉砂利敷きの出入口があり、『福岡城本丸之圖』等の古絵図に書かれた「フミ段土間」とはこれを指すものと見られる。また、これらの絵図から、月見櫓が2層、付櫓が1層の建物であったことが分かる。

さて、調査中に月見櫓の規模が明らかになるにつれ、当時崇福寺に月見櫓と伝えられていた仏殿の規模が7.95m×6.912mを測り、検出した基壇の規模を遙かに上回るなど、史料上の知見が言い伝えと一致しないことが問題となった。そして、調査後の1991（平成3）年6月の調査で、崇福寺仏殿の小屋組にこの建物が潮見櫓であることを示す棟札が発見され、仏殿が実は潮見櫓であることが明らかとなつた。しかし、潮見櫓は福岡城内に移築復元されたものが既に存在するなど、福岡城から払い下げられた櫓の名称が混乱したまま現在に伝えられていたことが判明したため、記念櫓等を含めて再検討する必要が生じており、現在も調査を継続中である。

PLATES

(図 版)





23



24



25

月

見

格

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第316集

1
9
9
2

福岡城

月 見 樓

福岡市埋蔵文化財調査報告書第316集

1992.3.31

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 アオヤギ株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9-31

福岡市教育委員会